

TOP MUSEUM

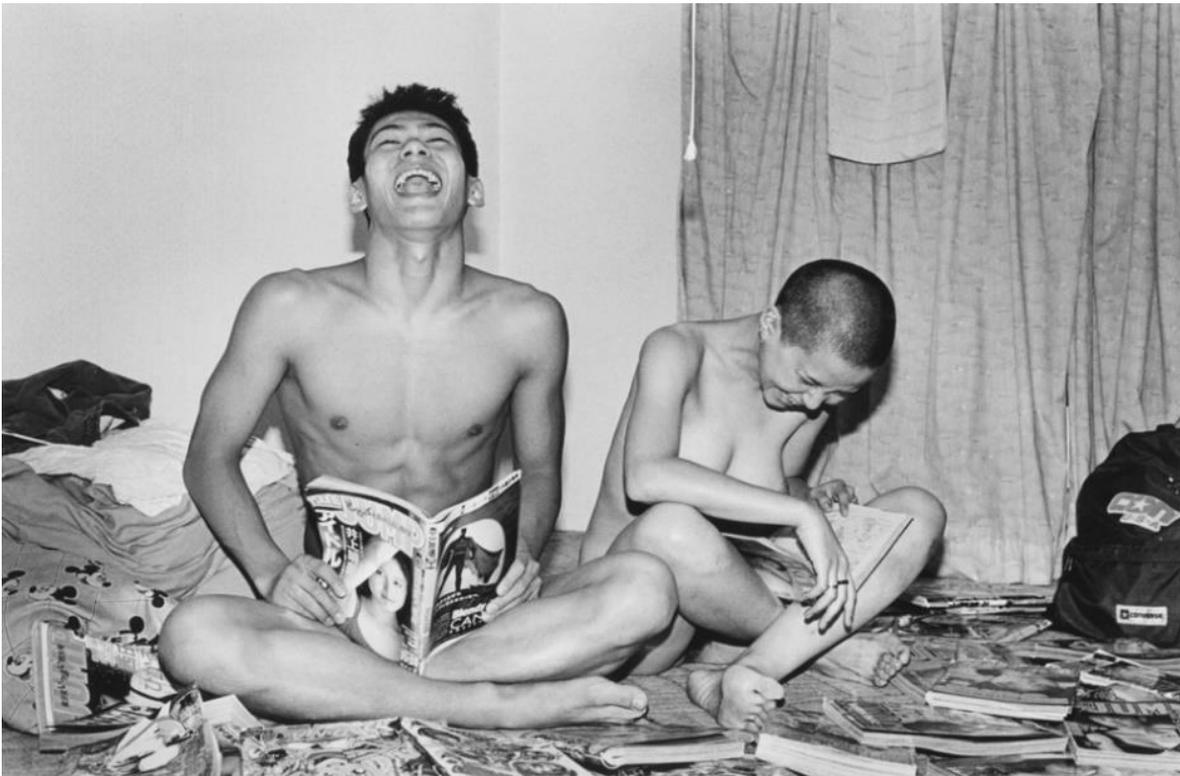
東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
TEL 03-3280-0099 FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

長島有里枝 そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。

Nagashima Yurie / And a Pinch of Irony with a Hint of Love

2017年9月30日(土)～2017年11月26日(日)



東京都写真美術館では、長島有里枝（1973-）の日本の公立美術館においてはキャリア初となる個展を開催いたします。デビュー以来、長島は社会における「家族」や「女性」のあり方への違和感を作品で問い続けてきました。長島は武蔵野美術大学在学中の1993年、家族とヌードで撮影したセルフポートレートで「アーバナート#2」展パルコ賞を受賞し、一躍注目を集めました。2001年には、写真集『PASTIME PARADISE』で第26回木村伊兵衛写真賞を受賞。近年では、2010年に『背中の記憶』で第26回講談社エッセイ賞を受賞するなど、デビューから24年を経たいま、写真以外にも活動の幅を広げています。本展では初期を代表するセルフ・ポートレートのシリーズから、2007年にスイスで滞在制作をした植物のシリーズ、女性のライフコースに焦点を当てた新作までを一堂に展示いたします。作家の「今」が色濃く反映された現在の作品とともに、これまでの歩みを振り返り、パーソナルかつポリティカルな視点にもとづく写真表現の可能性を探ります。

《Self-Portrait (Brother #34)》1993年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵

主な出品作

出品点数：205 点 [予定]

1. 〈Self-Portrait〉

約 20 点うち、9 点 東京都写真美術館蔵

家族とヌードで撮影したセルフ・ポートレートと、女子高生やダンサーに扮したセルフ・ポートレートなどで構成。前者は武蔵野美術大学在学中の 1993 年、パルコ主催のアート・コンペティション「アーバナート#2」展でパルコ賞を受賞した長島のデビュー作。後者は武蔵野美術大学を卒業したばかりの 1995 年 4 月、写真集『YURIE NAGASHIMA』（風雅書房、1995 年）としてまとめられたシリーズ。

2 〈empty white room〉 約 25 点

パンク・バンドのメンバーや美大の同級生、ストリートで出会った同世代の若者など、90 年代のユースカルチャーの担い手たち。友人でもある彼らと過ごした長島の日常のルポルタージュのような作品。写真集『empty white room』（リトルモア、1995 年）としてまとめられた。

3. 〈家族〉 約 40 点

95 年、キャサリン・オピーとの二人展「家族」（パルコギャラリー）で発表され、のちに写真集『家族』（光琳社出版、1998 年）としてまとめられたシリーズ。作り込まれたセットアップ写真のデビュー作とは異なり、日常の中で家族が見せる一瞬の表情や、おどけた仕草を軽やかに切り取っている。

4. 〈AMERICA〉 約 15 点

1995 年にアメリカ西海岸に渡ってから撮影された作品。スケートボード・コミュニティとの出会いをきっかけに、魚眼レンズを撮影に多用するなど、新たな人間関係の広がりによって、これまでになかった作風が生まれている。



《Tank Girl》 1994 年 発色現像方式印画



〈empty white room〉より 1994 年 発色現像方式印画



〈家族〉より 1994 年 発色現像方式印画



《Matt in Vertical Ramp》 1996 年

ゼラチン・シルバー・プリント

5. 〈not six〉 約 75 点

自身のパートナーを写したシリーズ。アメリカと日本を行き来しながら続けられた関係性はやがて、恋人から夫、息子の父親へと変化してゆく。デビュー当初から、「観察する主体」としての男と、「見られる客体」としての女という、写真行為における権力関係の攪乱を試みてきた長島の新しいアプローチでありながら、インティマシーという、もうひとつのテーマへの取り組みでもある作品。写真集『not six』（スイッチパブリッシング、2004年）としてまとめられている。



〈not six〉より 2000年 発色現像方式印画

6. 〈Family Portraits〉 約 5 点

「現在のポートレート—You are here—」展（パルテノン多摩、2005年）で発表されたシリーズ。実際には血縁関係がない人々をまるで記念日の家族写真のように撮影し、「家族とは何か?」という本質的な問いに立ち返る作品となっている。



〈母、息子、犬〉〈Family Portraits〉より 2005年 発色現像方式印画

7. 〈SWISS〉 約 15 点

2007年にスイスのアーティスト・イン・レジデンスで制作された作品群。作家が日本から携えていった、祖母の庭を祖母自身が撮影した古い写真に着想を得て、滞在先の広大な敷地に咲く花や野草を、ポートレート撮影の手法で撮影したシリーズ。写真集『SWISS』（赤々舎、2010年）として発表。



〈わたしたちの部屋(朝)〉〈SWISS〉より 2007年 発色現像方式印画

東京都写真美術館蔵

8. 〈家庭について／about home〉 約 20 点

2016年に MAHO KUBOTA GALLERY で開催した同名の個展で発表した作品を再構成した新作シリーズ。使い古したものの捨てられないでいる衣類や布地を素材に、かつてパリでお針子になりたいという夢を持っていた母を縫い子に迎えて共作したテントと、日常の家事に関する場面を切り取った写真作品で構成。ものを作るという行為を通して、母子の関係性、家庭という秘密の場所、歴史的に限定されてきた女性のライフコースに焦点を当てた作品。



〈Yesterday, Today, Tomorrow〉より 2015-2017年

発色現像方式印画

9. 〈Yesterday, Today, Tomorrow〉

1 点 (インスタレーション作品)

プライバシー意識の高まりなど社会状況の変化を受けて、以前のように街中で気軽にポートレイトを撮ることが難しくなったいま、あえて長島が取り続けているポートレイトの連作。散文のように軽やかで、何の銜もないパーソナルな視点がある。

長島有里枝 インタビュー

インタビューと文 野中モモ

—今回の展示は四半世紀にわたるキャリアが凝縮された内容になっていますね。

回顧展を、というお話だったので、昔のネガを全部ひっくり返して大変でした。初期の作品はアメリカに行く前かなり捨てていて、もう無いものもたくさんあります。

—武蔵野美術大学在学中にパンキッシュなセルフポートレートや家族揃ったヌード写真で強烈なインパクトを与え、若い女性たちの撮る写真に注目が集まる流れを先導しました。

もともと写真家になりたいというよりアートをやりたかったので、現代美術の公募展に出品しました。2015年に「ガリーフォト」についての論文を書いたとき調べたら、初期の作品ははじめ「女子大生ヘアヌード」と呼ばれていました。確かに学生でヌードではあるんですけど、当時流行していたヘアヌード写真に対抗するヌードが撮りたくてやっていました。「女の子写真」という言葉が生まれ出されるまで、雑誌で取り上げられるときは「美大生」とか「現役女子大生」と書かれました。「アーティスト」という肩書きも、ある日を境に「写真家」になりました。ヒロミちゃん（HIROMIX）や蜷川実花さんが注目されると、多くの女性写真家は「女の子写真」と括られます。当時のインタビューを読むと、わたしはその状況を面白がって、茶化している感じでした。メディアは持て囃しても、ほとんどのことは思い通りにいかなかった。もちろん仕事も来ないし。来るのは「映画の主演しませんか」とか、被写体として「見られる側」のオファーばかりで、そういうのは断りました。

—90年代後半はアメリカで過ごされていますね。

最初シアトルに行って、それからLAのカリフォルニア芸術大学に。友達の半分はセクシャル・マイノリティだし、先生もレズビアンという感じで、フェミニズムには特に力を入れている学校でした。アメリカでは、わたしが日本でやってきたことの受け取られかたも全然違った。バックグラウンドが違う人たちに自分の作品を説明する難しさを肌で感じたとき、「作品ってそれが生まれる社会のありかたが反映されるものなんだ」ということを考えました。

—現在は日本で子育てをしながら作品の制作を続けています。出産は大きな転機になったと仰っていますね。

息子の存在や彼との関係性よりも、自分が社会の中で演じなきゃいけない「お母さん」という役割、その大変さに、もう本当に打ちのめされたというか。やっぱり単純な話、アメリカに留学していた父親がちょこっと帰ってきて、そのときだけ赤ちゃんを抱っこひもして連れているだけなのに、知らないおばさんに「いいお父さんね」って道端でほめられる。わたしは毎日それをやっているけれど、一度もほめられたことないな……みたいなこととか。わたしが世帯主です、と市役所で言うと、話がこんがらがってしまったり、「変だなあ」と思うことばかりで。母親という役割を引き受けてからは、作品を作るときの意識がだいぶ変わりました。



—祖母が人知れず撮影していた庭の写真を使った〈SWISS〉をはじめ、あまり表に出てこなかった女性の創造性や存在そのものに光をあてるプロジェクトに取り組んでいますね。現在のパートナーの母親とタープを、実母とテントを共同制作するなど、布を使ったインスタレーション作品も、また一歩踏み込んで関係を築こうという試みです。

家庭に入っても何かを作り続けている女の人って本当にたくさんいるんです。祖母も日々、花を撮っていたんですね。その行為は誰にも評価されなかったわけですが、それは彼女が男じゃなかったことと密接に結びついていると思います。彼女には、外で働くという選択肢そのものがなく、もっと言えば、初めは参政権もなかったんです。いま、そういうことがすっかり忘れ去られていて、テレビや雑誌が提示する母親像も「綺麗でオシャレでかっこいい」みたいなことで覆い尽くされています。実際は、主婦業も母親業もかなりきつい仕事で、きれいごとではやっていけない。結局、女性はいつでも男の都合がいいように美しくあることを求められていて、癪ですね。さまざまな経験を経てあるいまを、そのまま美しいものとして受け入れる姿勢を、写真では貫きたい。だから、セルフポートレートだったら「いいね」がもらえそうな「見せられる」すっぴん顔より、疲れ切ってブスな「いい顔」を選びます。

—息子さんも高校生になられたとのことで、日々の暮らしも変わっていきそうです。今後やってみたいことはありますか。

先のことはわからないな……いまはこの展示のことで頭がいっぱいで。でも、その、みなさんもたぶんそうだと思うんですけど、居心地がいいことが大事ですよ。「みんなは何のために生きてるのかな」って、たまに思うときがあって。中2病みたいですけど（笑）。

変な話、わたしは気になることがあると質問したり、意見したりせずにいられなくて、議論になることもあるから、そうは思われてないかもしれないけれど、ただ、楽しくたいです。話し合おうとするのも、最終的にすっきり、楽しくありたいからで。服装も「ハイヒールで足が痛くても女の特権だから楽しい」みたいに思えないから、しないだけ。フェミニズムだからじゃないですよ。やりたいことは特にないけれど、イヤなことをやりたくないという強い気持ちだけでここまで来た気がします。今後もきっと、それを続けていだけかな。生活が大変だと人にあたったり、これ何のためにやってるんだろう、なんでもっと楽しいと思えないんだろう、と思う。それを自分のせいにしてきたときもあったけれど、「なんでこんな風にわたしが思ったりするような世の中の仕組みなんだろう」といまは考えます。面倒くさがりやなのに「変えなきゃ」と思うのは、そのほうがきっと、誰も楽だろうと思うからかな。ひとりで変えられるとは思わないけれど、仕事を通じて、まずは自分が言わなきゃ始まらない、とは思っていますよね。

(2017年7月)

作家プロフィール

長島有里枝 NAGASHIMA Yurie

1973年、東京都中野区生まれ。1995年、武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。1999年、カリフォルニア芸術大学にて Master of Fine Arts 取得。1993年、家族とのポートレートで「アーバナー #2」展パルコ賞を受賞しデビュー。2001年、写真集『PASTIME PARADISE』（マドラ出版、2000年）で、第26回木村伊兵衛写真賞受賞。2010年、エッセイ集『背中の記憶』（講談社、2009年）で第26回講談社エッセイ賞受賞。主な写真集に『YURIE NAGASHIMA』（風雅書房、1995年）、『empty white room』（リトルモア、1995年）、『家族』（光琳社出版、1998年）、『not six』（スイッチパブリッシング、2004年）、『SWISS』（赤々舎、2010年）、『5 Comes After 6』（マッチアンドカンパニー、2014年）など。

関連イベント

作家とゲストによるトーク

2017年10月8日(日) 14:00～15:30 野中モモ（ライター、翻訳家）× 長島有里枝

2017年11月5日(日) 14:00～15:30 志賀理江子（写真家）× 藤岡亜弥（写真家）× 長島有里枝

会場：東京都写真美術館 1階スタジオ

定員：50名

*当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2、第4金曜日 14:00より、担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケット（当日消印）をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

*事業はやむを得ない事情で変更することがございます。

展覧会図録

『長島有里枝 そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。』

編集・発行：東京都写真美術館

A4判変形、208頁

執筆者：レスリー・マーティン（編集者）、野中モモ（ライター、翻訳家）、伊藤貴弘（東京都写真美術館学芸員）

デザイン：須山悠里

開催概要

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞
助成 独立行政法人 芸術文化振興基金
協賛 株式会社ニコン／株式会社ニコンイメージングジャパン／東京都写真美術館支援会員
会場 東京都写真美術館 2階展示室
東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>
開館時間 10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）入館は閉館 30 分前まで
休館日 毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館）
観覧料 一般 800(640)円／学生 700(560)円／中高生・65 歳以上 600(480)円
※（ ）は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方と
その介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

このリリースのお問い合わせ先

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館
Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>
展覧会担当 伊藤貴弘 t.ito@topmuseum.jp 関次和子 k.sekiji@topmuseum.jp
広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp

Nagashima Yurie / And a Pinch of Irony with a Hint of Love

Sep. 30—Nov. 26, 2017

The Tokyo Photographic Art Museum is pleased to hold a solo exhibition by NAGASHIMA Yurie. Since her early career, Nagashima has worked on social problems appearing in photographic images, such as the consumption of women's bodies, or the overly glorified family system. Starting from very personal questions, in her practice she attempts to approach political issues in a radical yet elegant way. Over 20 years, her works have especially inspired younger generations in Japan, while also receiving much attention overseas.

In 1993, while still attending Musashino Art University, Nagashima was widely acclaimed after she won the PARCO Prize at the "URBANART #2" competition, for a series of nude self-portraits that she made of herself and her family. In 2001, she won the 26th Kimura Ihee Award for her photobook *PASTIME PARADISE*. Nagashima has recently shown her creativity outside of the photographic arena; in 2010, she received the 26th Kodansha Essay Award for her book *Senaka no Kioku*, a collection of stories that take her own early childhood as their overarching motif.

This exhibition—Nagashima's first full-scale retrospective at a Japanese public museum—includes a wide range of her works; her representative early series *Self-Portrait* and *Family*; a series shot in the 1990s on youth culture, *empty white room*; photographs from her time studying in the United States; a series on plants that she made at an artist-in-residence program in Switzerland in 2007; and a new series on the courses of women's lives.

Nearly a quarter-century after her debut, Nagashima continues to expand the scope of her expression: she continues to seek new modes of production, including various collaborations. This exhibition reflects the present state of the artist's recent works, while also looking back at the route that she took to arrive here—and also explores the very possibility of a photographic expression grounded in the personal and the sociological.

Lecture

Gallery Talks (in Japanese)

Talks take place at 14:00 on the 2nd and 4th Friday of each month. Free with same-day museum admission.

Exhibition

Closed Monday (if Monday is a national holiday or a substitute holiday, it is the next day)

Admission : Adults ¥800 / College Students ¥700 / High School and Junior High School Students, Over 65
¥600

Organized by Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture, Tokyo Photographic Art Museum,
The Tokyo Shimbun

Supported by Japan Arts Fund

Sponsored by Corporate Membership of Tokyo Photographic Art Museum, NIKON CORPORATION, Nikon Imaging Japan inc.